

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

「龍馬ゆかりの地・安田町と龍馬精神」

竹内 土佐郎



安田で育まれた感性
義兄 高松順蔵の下で

龍馬は、二五〇年余に亘る徳川幕府を終焉させ、明治政府の樹立に貢献した維新のヒーローである。高知城下に郷土坂本八平の五人兄弟の末子として生まれた。その長姉千鶴は、母方の従兄である安田郷（現・安芸郡安田町）の郷士・高松順蔵の妻で、順蔵は儒学者であり、和歌、南画に加え剣術にも秀でた文武両道の人。近郷の志士達に与えた影響は計り知れない。順蔵の高風と、その学徳を慕つて教えを乞う者は多く、門下生には龍馬の盟友・中岡慎太郎、海援隊士・石田英吉、甥であり海援隊士、後に龍馬の嗣子となる高松太郎（のち坂本直）、同じく甥で兄権平の跡を継いだ自由民権家の高松習吉（のち坂本直寛）、土佐勤王党員で野根山二十三士首領・清岡道之助が多くがいる。

順蔵は、八歳の時に父から郷士の家督を受け継ぐが、早くに弟勇蔵に家督を譲り、隠居して若い志士を教えることに専念した。儒教主義の傍ら聖書をも有し、自らを布衣（平民）と称し、自愛の精神をもつて多くの人から敬慕されている。

国思ふ志をついに、
私心なき仲間達との出会い

度となく見かけた」という逸話が残されている。長い幕藩政治の中で土佐藩は、特に厳しい上士と下士といふ身分差別があった。郷士たちはこの格差に怒りと悲しみを持っていた。

龍馬が眼前に開ける太平洋の風を受けながら、義兄順蔵の下で「人間で寝小便たれの末子・龍馬を、強くしていた姿が想像されるのだ。

喧嘩や勉強を好まず、泣きみそでしかりとした人間に育てたいと、



「楠正成・正行親子桜井の別れ」高松順蔵

順蔵は、八歳の時に父から郷士の家督を受け継ぐが、早くに弟勇蔵に家督を譲り、隠居して若い志士を教えることに専念した。儒教主義の傍ら聖書をも有し、自らを布衣（平民）と称し、自愛の精神をもつて多くの人から敬慕されている。

私の中芸高等学校時代に

ここからは私事だが、これら多くの志士たちが学んだ田野学館跡であり、その姿を彷彿とさせる中芸高等学校で27年間もの長きにわたって教鞭をとることができた。このことを私は誇りに思い、また自身の母校であつたが由に、非常に感慨深いものがあつた。

由緒あるこの土地で、先人たちの魂に思いを馳せ、最後に校長として文武両道柔道や勉学に生徒たちと共に励んだことが懐かしく、また気持ちを新たにさせられるのである。

嚴父坂本八平が安田の順蔵、千鶴のところへ連れて来たと思う。それはどに順蔵という人物の評価が高かつたということである。実際、古老人によると「龍馬は、度々安田へやつて寝転んでいた。また、鳴居に手を掛け眼下の広漠とした太平洋眺め、何かもの思いにふけるような姿を幾

要素がこの地域に備わっていたのか、平太が藩命により剣術を教えに来ていたし、そうした情熱が集合する野町にある「田野学館」には武市半も知れぬ。中岡慎太郎、清岡道之助などは言うに及ばず、石田英吉など

は元々将来の自らの生き様として医師を志していたのが「今、身の治療よりも、むしろ国家の治療こそ大切である」と海援隊士に。また野根山二十三士の一人・柏原省三は「御國の政を矯正するに、死をもつて君へ御奉公する覚悟である。御世話をなった父母の先途を見届けもせず死して名を後世に上げ

龍馬をこの幕末の改革に駆り立てたスピリッツは何であったのか。龍馬は身分差別による苦しみや悲しみから脱却し、万民が平等で平和であることを願い、行動した。その願いと行動こそが龍馬精神であり、命を懸けて新しい国づくりの実現に向かわせた。この龍馬精神は世直しの鑑としてこれからも燐然と輝き続けることであろうし、その根底には脈々息づく「安田時代」抜きには語れないと思う。

“龍馬スピリッツ”とは

人題ビューアー 話題インタビュー 未来の龍馬たちへ

川崎弘佳さん 高知市立昭和小学校教頭 現代龍馬学会理事

かわさき ひろか

高知市立昭和小学校教頭



今 年11月8日、9日、昭和小学校が全国社会科で代表校として「坂本龍馬」を全国社会科の教科書に組み込む提案をする。その中心となり、龍馬ながらに奔走し、活動しているのが川崎先生だ。

龍馬のライフスタイルは小学生には格好の教材になると熱く語るその核心とこれまでの展望についてうかがつた。

——龍馬と川崎さんの最初の出会いは?

私が初月小学校6年生の頃です。その頃、地元の古老の方が、6年生全員を講堂に集め、坂本龍馬の話をしてくださいました授業がありました。當時相当高齢の方だったので、もうお亡くなりになつてゐるかと思うんですが、話のうまい方でした。

鮮明に覚えていたのが、龍馬が京都の近江屋で暗殺されたときの場面です。身振り手振りで臨場感があつて、子ども心に「ああ怖い!」龍馬、なん死んでしまつたんやろう、今から日本を変えるのにもうたない!と胸をしめつけられました。その話が私の頭に小学校6年の授業としてずっと残つてました。

思えば、郷土の歴史を学ぶすばらしい機会を、当時の社会科の先生が作つてくれたおかげで、今、私は龍馬を社会科の授業にしようと思つたのかもしれません。



龍馬の親近感と可能性

小学校では卑弥呼とか聖徳太子という歴史人物を勉強します。もちろんそこから子どもたちはいろいろなことを学ぶわけですが、「親近感」という意味で群を抜くのはやはり坂本龍馬だと思います。

小さな頃じめらつて寝小便たれで弱虫だった龍馬が、新しい日本を作るという大志をもって時代を変えようとする。そして、もう少しどうところで暗殺されてしまふ。未くなつてしまふんです。

それはもちろん悲劇ではあります、子どもたちは、そこから先を考える教材になります。

虫だつた龍馬が、新しい日本を作るという大志をもって時代を変えようとする。そして、もう少しとくろで暗殺されてしまふ。未くなつてしまふんです。

西郷隆盛、木戸孝允という歴史の表舞台に立つ人がいる裏で、一所懸命根回しして、準備をした人がいることに、もっと光を当てるべきだと思うんですね。

——今まで龍馬を学んだ子どもたちはどのような反応ですか?

——カルチャーの違いですね(笑)。

サエティの方が私のところにそつと寄つて来て「先生、大丈夫ですか、弁護士頼んりますか?」と真剣におっしゃったことです。アメリカでは万のことがあつたら訴えられるというんです(笑)。

そのとき思つたのはやっぱりアメリカの高校生は意見をきちんと言えるなあと、うなづいていました。

私たちが教育をしていく目的は「自発的意見を持つてはいるはずなのに、やはり恥ずかしい」と発想できましたよ(笑)。

でも表現能力をつけている意味での教育レベルについては、日本はまだがんばらねばいかんなあと思いました。

私たちが教育をしていく目的は「自発的に学べる子ども」になつてもらうことなんですよ。これから求められるのは、自分で判断して、考えをしっかりと述べることができます。

——日本にホームステイされたアメリカの先生方もとも活発に交流されましたよね。

そうなんですよ。こちらでは小学校でウェルカム集会を開催しました。面白かったのは、かが包丁で刺身を切つていてのを見て、ジャパンソーダだつたんですね。

ます。もし自分が龍馬だったらどんなことができるだろう、とか、もし死んでいなかつたら

がやつている

地道な作業、

ワークシート作り

が必要なんですね。

それから、龍馬を学習する良さは「プロセス」です。龍馬の努力とか根回しだとか、縁の下の力持続的なプロセスがいかに大切かを、今の子どもたちに教えたい。

西郷隆盛、木戸孝允という歴史の表舞台に立つ人がいる裏で、一所懸命根回しして、準備をした人がいることに、もっと光を当てるべきだと思うんですね。

——この龍馬学習は全国展開ですか?

もちろんです! 全国の学校の先生に社会科の「龍馬」を知つていただくためには、やは

り今まで龍馬を学んだ子どもたちはどのよ

うな反応ですか?

——川崎先生はアメリカフォーラムにも参加されましたか?

うん、日本の龍馬を学ぶ子どもたちと向こうで、一緒に共感し、自分のことのように親近感を抱いてくれるんですよ。そして、彼の人生から前向きな気持ち、優しさと挑戦する強さの両方を子どもたちは感じとつてくれているみたいですね。

「勇気をありがとう」とか、「僕も将来は龍馬のように何かをしたい」という、強い決意を感じる感想文が非常に多いんですよ。

——今年実施される龍馬の社会科教育を再びスタート地点に、先生の挑戦が始まることになりました。

「龍馬の好きな食べ物は?」というものが、ニューヨークの切り口は若干違つていました。ハワイのプナホウスクールの学生さんたちは「日本語の習得」を主眼としていたので、質問も

も子どもも確かに手ごたえを感じています

し、何より先生たちが「学んでよかつた」と言つていますので、その点は自信をもつてがんばつて

いきたいと思っています。

「ネチカット」で龍馬に再会

——川崎先生はアメリカフォーラムにも参加されましたか?

うん、日本の龍馬を学ぶ子どもたちと向こうで、一緒に共感し、自分のことのように親近感を抱いてくれるんですよ。そして、彼の人生から前

向きな気持ち、優しさと挑戦する強さの両方を子どもたちは感じとつてくれているみたいですね。

「勇気をありがとう」とか、「僕も将来は龍馬のように何かをしたい」という、強い

決意を感じる感想文が非常に多いんですよ。

——今年実施される龍馬の社会科教育を再び

スタート地点に、先生の挑戦が始まることになりました。

「龍馬の好きな食べ物は?」というものが、ニューヨークの切り口は若干違つていました。ハ

ワイのプナホウスクールの学生さんたちは「日

本語の習得」を主眼としていたので、質問も

も子どもも確かに手ごたえを感じています

し、何より先生たちが「学んでよかつた」と言つていますので、その点は自信をもつてがんばつて

いきたいと思っています。

——11月の大会を楽しみにしています! 今日はありがとうございました。

子どもたちは無限の可能性を持つていて、やはり教育は最高に創造的な仕事だなあと改めて実感しています。

——11月の大会を楽しみにしています! 今日はありがとうございました。



第50回
全国小学校社会科研究協議会
研究大会・高知大会

平成24年
11月8日(木)13時30分～16時50分
9日(金)9時30分～16時10分

県民文化ホール(グリーンホール)

分科会場(第1) 南国市岡豊小学校

主催・全国小学校社会科研究協議会

高知県社会科教育研究会

渡辺瑠海(よしのり)
エッセイスト、記念館職員。
現代龍馬学会理事をつとめる。

渡辺瑠海(よしのり)

エッセイスト、記念館職員。

現代龍馬学会理事をつとめる。

渡辺瑠海(よしのり)

エッセイスト、記念館職員。

現代龍馬学会理事をつとめる。

渡辺瑠海(よしのり)

エッセイスト、記念館職員。

現代龍馬学会理事をつとめる。

渡辺瑠海(よしのり)

エッセイスト、記念館職員。

現代龍馬学会理事をつとめる。

渡辺瑠海(よしのり)

エッセイスト、記念館職員。

現代龍馬学会理事をつとめる。

渡辺瑠海(よしのり)

エッセイスト、記念館職員。

現代龍馬学会理事をつとめる。

「ほれ話」

犬歩棒当記（九）

左手に巻紙、右手に筆

京都国立博物館 宮川 権一

龍馬が土佐の家族にあてた最後の手紙は慶応三年十月九日付けの兄権平あてのものである。京都国立博物館に収蔵されるその手紙は長くはない。大政奉還直前の混沌とした状態の京都へ無事に到着したことを家族に知らせるものである。

この手紙の実物をよく見ると、うつすらとした墨の文字が本文の左下部分に付いていることが分かる。有名な手紙なのでお手元の図録などにも掲載されているものだ。筆者はこの墨写りがどういう意味なのか、これまであまり気にしてこなかつた。

しかしよくよく考えてみれば、これは龍馬がどのような姿勢で手紙を書いたのかを示す貴重な実例であることが分かつた。すなはちこの手紙は龍馬が文机の上ではなく、便箋である巻紙を左手に持つまま右手で筆を走らせて書いたものだったのだ。

卷紙を左手に持つて手紙をしたためる場面を時代劇などで見ることがある。龍馬の他の手紙ではまだ見つかっていないが、この兄権平あての手紙はそういう姿勢で書かれたのだ。文字が等間隔に左写りしている。「梅太郎」の「梅」の字（点線内）で最も明瞭である。すなわち巻紙を透過した墨写りだったのである。

現代ではつい巻紙の内側が紙の表側だと考えがちだが、巻紙の外側が正しい紙表なのだ。

この龍馬の手紙はとても急いで書かれた。慶応三年十月の京都が忙しいのは日本史上に明らかだ。坂本龍馬がその当事者であったからである。

（前回の記事で高松順蔵のことと医師と記したが、高松清和氏・土居晴夫先生から「郷士」であるとの御指摘を受けた。お詫びして訂正いたします）

（写真）慶応三年十月九日
坂本龍馬書簡兄権平あて（部分）

コラム・龍馬のこと

龍馬とお龍が紡ぐ縁 お龍さん祭りのこと

元高知市議会議長 岡崎洋一郎

龍馬の太く短い人生の中で、維新回天の大業に奔走しつつも、檜崎家のお龍さんとの出会いと、二人が強い絆で結ばれてすごした龍馬終焉前の数年は、人間龍馬の生涯を一際ドラマチックに彩り煌めかせている。龍馬に先立たれた傷心のお龍さんの晩年は幸せと言えるものでは無かったようだが、龍馬と共にした日々が心にまとわりついて、お龍はそれを消し去ることが出来なかった人生だったよう想像。このお龍さんのお墓が横須賀市大津の信楽寺にある。毎年十月十日頃に開催されるお龍墓前祭に、私が初めて出向いたのは平成十五年で高知市議会副議長としてであった。高知市議会と横須賀市議会は、龍馬とお龍の縁で、平成九年五月に当時の岡村康良議長と竹折輝隆議長が、京都伏見で第十四代当主寺田屋伊助氏を立合人として両市の友好議会の盟約をしていることによる。私は初参加時の挨拶で「お龍さんの妹の起美（君枝）が嫁いだ菅野覚兵衛や、後に横須賀でお龍と松兵衛さんの仲人をした安岡金馬等海援隊士と同じ芸西村の出身であり、現在の住いがこと同じ地名の大津で、更にクレー射撃の射友で横須賀市議の青木良夫氏（故人で今はご子息秀介氏が市議）とのご縁も重なって、とても親しみを覚える」と話したことであった。

以来議長職の時も含め去年で公私五回、お龍墓前祭に参加した。そして横須賀市議会の諸兄や地元の関係者と絆を深め合って今日に到っている。参加の都度高知市の観光部課長や議長さんと、また芸西村からは藤戸教育長に同行を呼びかけ、一度は龍馬研究会の宮尻さんとも参加出来て交流を深めた。安岡金馬の子孫の中村和義さんご夫婦や、横須賀龍馬会の皆さんとも交流が深まり、そんなご縁の拡がりから、去年は高知市の龍馬生誕祭に、お龍さんの家系檜崎家の子孫である守谷恭子さんとお嬢さんの由美子さんを高知にお迎えし、お龍と君枝の銅像のある芸西村をご案内出来た。

村では竹内村長さんや郷土史家の門脇鎌久さん等と、龍馬とお龍談議が出来たことも有難く嬉しく思っている。今後も更なる交流と絆の深まりを願ってやまない。

“話してみるかよ”

“歌は世につれ人につれ” 永国淳哉

“歌は世につれ人につれ”という。

関義臣の懐旧談「海援隊の回顧」の中に、龍馬が登場し、長崎で唄っている。

「隊士等を率ゐて、玉川、花月どへ登樓し、平生の無口に似合はず、盛んに流行唄など唄ふ。(中略)

龍馬は、頗に似合はぬ、朗々、玉を転ばすやうな、可愛い声で『障子開ければ、紅葉の座敷……』と、例のヨイショ節を、能く唄った。』

龍馬が「可愛い声」で唄っていたというのである。

最近、話題になっている「おんちゃんコーラス」。お得意は“龍馬は、今もいきている”で、台詞もあり、何度聴いてもいい。大声が気持ちいい。

私たちより一代世代前の日本男児たち。“土佐のいごっそう”を画に描いたような亡父を想い出す。晚酌の後、気分のいい時は妹を膝に乗せ“ミカンの花が咲いていた・・・”と、得意げに唄い出す。

まさに“顔に似合はぬ、可愛い声で”唄うのである。

“思いでの道、丘の道、はるかに・・・”

「日本の詩歌には悲哀と優しさが底流に存在している」と、新渡戸稟造が「武士道」で述べている。

考えてみると、自分も同じだった。「日本男児たるもの、他人の前で歌など唄うものでない」と、同級生も皆考えていた。中高校時代の音楽時間、真面目に唄う男児は一人もいなかった。

それが、大学合唱クラブやハワイヤングループに入り、歌声喫茶へ入りし、変わった。カラオケから今や童謡まで唄って楽しんでいる。

声も、“腹から出す”練習をしている昨今である。

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
<http://ryoma-kinenkan.jp>